

研究ノート

ウィリアム・インジの病跡 —うつ、アルコール依存、同性愛—

二木 文明^{*1}

要旨：ウィリアム・インジ (1913-1973) は1950年代を中心に活躍した米国の作家であり、舞台劇『ピクニック』や映画『草原の輝き』の脚本などで知られる。60年代以降、ヒット作に恵まれず、劇作から小説へと軸足を移したが、いずれも不評で、最後の作品は出版を拒否された。彼は若い頃からうつとアルコール依存に陥り、また、同性愛者であったがそのことを恥じ、60歳で自ら命を絶った。インジの作品の主要なテーマは“現実を受け入れること”や“妥協”であると評されるが、これらは人生訓というよりも彼の性格に由来するのだろう。家族関係をみるならば、父親はセールスマンで一年のほとんどを留守にしていたため、インジは神経質で過保護な母親と14歳年上の兄の影響下で成長した。彼の性格傾向と同性愛は、主としてこの2人との心理力動的関係の中で培われたと考えられる。インジにあっては、作家の道を選ぶ以外、性格に由来する生きづらさと同性愛の苦悩から逃れるすべはなかったこと、しかし、創作能力が次第に衰退していったが故に自殺へと追い込まれてしまったことなどについて考察した。

キーワード：ウィリアム・インジ、うつ、アルコール依存、同性愛、アメリカ演劇

【はじめに】

作家の村上春樹が「観るたびに胸打たれる映画」の一つにエリア・カザン監督の『草原の輝き Splendor in the Grass』を挙げていた³³⁾のを読み、筆者も改めてこの映画のDVDを鑑賞し、名作という思いを新たにした。その際、この映画が1962年のアカデミー賞脚本賞を受賞していることも知り得た。

資料をあたってみたところ、脚本を書いたのはウィリアム・モッター・インジ (William Motter Inge :1913-1973; 以下「インジ」と略記) という人物であり、彼は1950年代を中心に活躍した米国の著名な劇作家で、ヒットした舞

台劇としては『愛しのシバよ 帰れ Come Back, Little Sheba』や『ピクニック Picnic』、『バス停留所 Bus Stop』などがある。

これらの舞台劇はいずれも映画化されており、筆者はそれらもDVDで観たが、興味深かったのは、特典映像として付いていた、当時インジと交流のあった知人たちの回想や証言である。彼らによると、インジは若い頃からうつ (depression) とアルコール依存 (alcoholism) に陥り、また、同性愛者であったがそのことを恥じ、60歳で自ら命を絶った。結婚することはなく、終生独身を通したという。

インジの創作活動とアルコール依存やうつ、そして同性愛の間には何らかの繋がりがあった

*1 東北文化学園大学 医療福祉学部 保健福祉学科

のだろうか。繋がりがあるとするならば、それらメンタル面の病や性的指向は創作活動に対してどのような影響を及ぼしていたのだろうか。その辺りの関心から、筆者はウィリアム・インジの病跡研究を思い立った。

わが国ではその作品が著名な割には伝記なども翻訳されておらず、インジの人となりについてはほとんど知られていない。インジその人を紹介してみたいということも、この研究に着手した動機の一つである。

[方法]

本研究は病跡学的手法に拠った。病跡学とは、作家や芸術家など傑出した人物の精神的病ないし病的傾向とその創造性の関係を、生活史の記録をもとに明らかにする研究を指す。

なお、分析の対象とする資料は、公に発表されたもの、すなわち既に出版され、筆者が入手し得たインジの評伝や、追悼・批評集であり、公開されていない私信などは扱わない。

具体的には、R. バード・シューマン（以下「シューマン」と略記）及びラルフ・F. ヴォス（以下「ヴォス」と略記）による評伝^{35,45)}に多くを負った。調べた限りにおいてだが、インジの評伝はこの二冊以外に出版されていないようである。また、ジャクソン R. ブライアーとメアリー C. ハーテッグ編による『ウィリアム・インジ作品の批評と回想 -』³⁾は、13名の批評家らによるインジ作品の批評と17名の親族・知人たちの回想からなっており、彼の作品や人となりを窺い知ることのできる貴重な資料である上に、インジに関するものとしては2014年の最も新しい出版でもあるため、これも活用した。言うまでもないが、インジの手になる劇作品とシナリオ、小説はあらかた - 出版されたものに限られるが - 目を通した。

インジに関して日本で出版された批評集としては、法政大学出版局の『アメリカ演劇 11 ウィリアム・インジ特集』以外に見つけることができなかったが、重要な指摘^{32,34,44)}が散見されたため、この資料からも二、三の引用を行った。

その他、ジェフ・ジョンソンとアーサー F. マクルアー、わが国の長田光展によるインジ論

も入手し得たが、本論考で言及や引用すべき点を特に認めなかったため、参考文献として稿の末尾に挙げた。

[結果ならびに考察]

I. その生涯

インジは1913年、米国のカンザス州インデペンデンスに父ルーサーと母モードのもと、5人兄弟の末子（兄一人、姉三人）として生まれた。ルーサーは、布製品や衣服を売り歩く旅回りのセールスマンだった。そのため、ほとんど家を留守にしていた。（図1にインジ幼少期の家族構成を示す。）

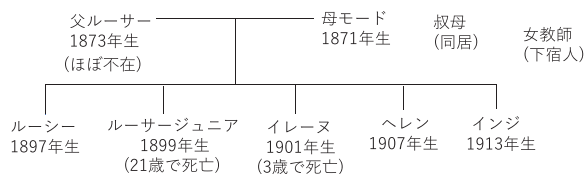


図1. インジ幼少期の家族、同居者

子どもの頃からインジは朗読が得意で、学校や地域の集まりで詩を詠んだ。それが、その後の演劇のキャリアの端緒となった。インジ7歳のとき兄が急逝したため、母親の関心が彼に向けられるようになったが、それは過干渉・過保護とも呼ぶべき性質のものだった。同時にそれは、インジの“女々しさ”や“ママの子ども”という評判の始まりでもあった。

13歳でハイスクールに進んだが、もっとも熱を入れたのは演劇だった。また、詩と小説に関心を抱き、特にワーズワースを愛読した。

17歳でカンザス大学に入学したが、演劇に対するインジの関心は衰えることがなかった。アメリカ大恐慌による経済的事情で休学を余儀なくされ、一旦地元に戻りジュニア・カレッジに通った。大学に復学した後も演劇への愛着は続き、役者として舞台にも立った。この大学時代、自分のセクシュアリティが他と違う、すなわち、同性愛への指向を自分が持っていることに気づいた節が窺われる。

インジは役者になろうと志したが、経済的な自立という問題もあって、とりあえず演劇を教

える教員の資格証明を取ろうと考えた。そして、カンザス大学を卒業した22歳のとき、教員養成課程として評判の良かったピーボディ大学の大学院に進んだ(図2)。この大学院時代、「ソートン・ワイルダーのわが町 Thornton Wilder's Our Town」という公演で聖歌隊指揮者の役を演じたが、そのとき恐ろしいほどの自意識と恐怖に襲われ、もう役者になることは諦めようと心に誓った。また、この頃に初めて、うつ(Depression)に陥った^{注1)}。



図2.『William Inge』(文献1: 口絵)

修士の学位を取った後、1938年の秋からコロンビアのステファン大学で、英語の創作とドラマを教えた。この時期は一つに、役者となる夢は潰えたが、創作を積極的に試みた時期である。二つ目には、失意とうつと戦うために飲酒を覚えた時期でもある。三つ目には、うつと飲酒の問題に対処しようと精神科の治療を初めて受けた時期である。

1943年、インジはセントルイスに移り、スター・タイムス紙で美術と音楽、ドラマ批評を担当した。スター・タイムス紙で働いていた1944年、テネシー・ウィリアムズと出会った。テネシーと知り合うようになって、自分も劇作家になろうと思いつき、インジは劇を書き始めた。3ヶ月後書き上げたのが『天国から遠く離れて Farther Off from Heaven』であり、1947年、ダラスで初演となった。これによってインジは劇作家として認められた。

1948年になって、インジは自分の飲酒が一線を越えてしまったことを自覚し、精神科医に相

談したところ、A.A.^{注2)}に出席してみるようアドバイスを受けた。短期間、精神科に入院したこともあった。入院先はカンザス州トピカにあるメニング・サナトリウムだった。ちなみに、『草原の輝き』でヒロインのディーニーが入院したところは、ここをモデルにしたといわれている。

2本目の作品『愛しのシバよ 帰れ』がプロデューサーの評価を得、ブロードウェイで1950年2月から7月まで191回上演され、成功した。インジは仕事を辞め、ニューヨークのコネチカットへ移り住んだ。なお、『シバ』は2年後に映画化され、主演のシャーリー・ブースはアカデミー主演女優賞を受賞している。

その後、インジはダコタのアパートに転居するが、この時期は彼の人生で最も成功し、生産的な時代となった。とはいえ、本人は「落ち込んだ気分の中にあっただ」と語っており、グリニッチビレッジで治療(精神分析療法 psychoanalysis と思われる)を受けていた。それでも、次作『ピクニック』の執筆は規則的に続けていた。

1953年2月19日『ピクニック』の初演が行われ、477回のロングランを続け大ヒットした。この作品の結末はインジが当初考えたそれとは異なり、舞台監督のジョシュア・ローガンの強引ともいえる促しによって正反対のハッピーエンドに書き換えられたのだが、その仔細については次の章で詳述する。

1950年代の前半、インジは多く的一幕ものを執筆したが、それらの作品には、当時受けていた精神分析の治療の影響を窺うことができる。なお、1954年6月、父ルーサーがインデペンデンスで亡くなった。しかし、インジは葬儀に出席しなかった。

次作『バス停留所』の公演は1955～1956年にかけて行われ、478回のロングランとなり、インジの舞台の中では最も回数が多い作品となった。

インジが新たに取り組んだ『階段の上の暗がり The Dark at the Top of the Stairs』は、インジの劇作の中で最も自伝的な作品である。1957年12月に上演されたが、この劇は評判が良く、オープニング翌日の大半の批評がインジの最上の劇であると評した。468回の連続公演と

なり、映画化の権利も早々に売れた。この1957年、インジは自身のキャリアの最高地点にいた。

翌1958年、同じニューヨークのサットンプレイスに住居を移し変えたが、この頃、インジは気分の変調に悩んでいた。A.A.のミーティングには、時々だったが出席していた。

同年6月、母モードが86歳で亡くなった。インジは父親のときと同様に、彼女の葬儀にも出席しなかった。母親の死がインジの心の奥の抑圧を緩めたためか、彼女の死後、自らのアルコール依存と精神分析の治療を受けていることを公にした。ただ、同性愛は決して明らかにしなかった。

この年の夏、コロンビア大学教授ロバート・ブルースタインの『ウィリアム・インジの、男を飼いならす女たち』(Robert Brustein: The Men-Taming Women of William Inge, Harper's 1958.)が発表された。この評論の趣旨は、インジの成功した4つの劇が家庭生活と愛情の説教じみた推奨であり、そうした家庭では支配的な女性(妻)が、象徴的な去勢を通して一家の長である男性(夫)の精神と自由を飼い慣らすというものだった。インジは無視しようとしたが、できなかった。打ちのめされて彼は、電話で泣きながらブルースタインに抗議した。インジは以前から自己不信を抱いていたが、この批評はそれを一層助長した。それが自信喪失に繋がり、次の劇『失われたバラ A Loss of Roses』(以下『バラ』)を執筆する際、彼を悩ませた。

『バラ』の初演は1959年12月だったが、失敗作と評され、25回で公演を打ち切られた。この作品もブロードウェイでの一連の成功作に加えられるだろうと期待していたので、インジは途方にくれた。

1960年、インジはハリウッドへ行き、新たな作品の映画化について相談するためにエリア・カザン監督と会った。それが『草原の輝き』であった。これは舞台用に執筆したものではなく、最初から映画の脚本として書かれた作品だった。この映画は1961年に公開され、全米中の映画館で上演されて好評を博した。翌年、インジはアカデミー賞脚本賞を受賞した。

1963年1月、舞台劇『自然な愛情 Natural Affection』がニューヨークで初演となったが、

36回の公演で終わり、『バラ』と同じく失敗作になった。

インジのうつは1964年に悪化し始め、薬物治療をいっそう必要としていた。薬物は穏和精神安定剤(クロルジアゼポキシド;chlordiazepoxide)を使ったが効き目なく、気分を切り替える目的でニューヨークを引き払いカリフォルニアのロサンゼルスに引っ越した。また、効果に期待を持ってないという理由で、精神分析の治療もやめた。

この頃から、彼は散文を書こうとした。以前から自伝的な文章を書き溜めていたが、カリフォルニアに来てから日々書くようになった。それはやがて、自伝的小説『むすこはすてきなドライバー My Son Is a Splendid Driver』(以下『ドライバー』)として1971年に出版されることになる。

1966年頃、インジのうつは重くなり、飲酒も重なって、悪化した。そのため、カンザス大学のメディカルセンター精神科に入院した。治療によって改善し、自宅に戻り、彼は劇や散文、批評などを書こうとした。

この時期に執筆したのが、劇『最後の付箋 The Last Pad』だった。これが舞台化されたインジの最後の作品で、1970年に初演されたが、出来は良くなかった。劇の不評が続いたため、彼は創作のジャンルを小説へと変えた。それが『さようなら、ミス・ワイコフ Good Luck, Miss Wyckoff』(以下『ミス・ワイコフ』)と『ドライバー』である。しかし、同年に出版された『ミス・ワイコフ』に対する書評は好ましいものでなかった。売れたのは11,677冊だけだった。

その後、インジの引きこもりは顕著となり、カリフォルニア大学の講義も休んだ。孤独と飲酒、睡眠薬によってインジのうつは悪化した。それでも、短期間の入院と治療を受けた後、彼は気を取り直して執筆を再開した。

1970年の後半、姉のヘレンがインジのところに同居し、彼の世話をするようになった。だが、インジは段々と書けなくなっていた。翌年の1971年に『ドライバー』が出版されたが、書評は少なく、売れたのはたった7792冊だった。

1973年6月1日、精神安定剤を過量に服薬して、インジはロスアンゼルスウェストウッド

病院に短期間の入院をした。4日後、医師のアドバイスに耳を貸さず、彼は退院した。

6月10日の夜明け前、ヘレンがガレージの車の中にいるインジを見つけた。しかし、すでに彼は亡くなっていた。死因は一酸化炭素中毒(carbon monoxide poisoning)だった。死の前後の状況から、インジはガレージを閉め切ったままで、メルスデスベントの運転席に座って車の窓を全開にし、エンジンをかけっ放しにしていたのだと推測された。

居間のテーブルの上に茶色い封筒が残されており、その中にはインジの最新作『サーカスから来た少年 The Boy from the Circus』が入っていた。しかし、それは出版を拒否され送り返されたものだった。

(以上のインジの生涯は、ヴォス⁴⁵⁾ およびシューマン³⁵⁾による評伝をもとにまとめた。)

(注1:参考にした英文資料中の「depression」を本稿では「うつ」と訳した。「うつ病」ではなく「うつ」と訳したのは、インジの場合、内因性疾患、すなわち精神病圏の「うつ病」だったのか、あるいは神経症圏の「うつ状態」だったのか、諸資料から判断することが難しかったからである。)

(注2:A.A.とはアルコールリックス・アノニマス Alcoholics Anonymous のことであり、アルコール依存症者の自助グループである。)

II. 作品の特徴 - 現実を受け入れること、妥協、諦念 -

詳しくはこの章の後半で触れることにするが、インジの作品をめぐって研究者たちはその特徴が“現実を受け入れること”や“妥協”、“諦念”などの点にあると指摘している。その特徴が明瞭に現れているのは、とりわけインジの創作活動前半の劇作やシナリオにおいてであろうと筆者は考える。そういうわけで以下、評価の高い前半の代表的な作品三つを紹介しながら、同時にそれらの持つ特徴についても明らかにしてみたい。

『愛しのシバよ 帰れ』(以下『シバ』と略記)⁷⁾は、その脚本が高く評価され、それまで新進の劇作家にすぎなかったインジをブロードウェイでの華々しいデビューへと導いた最初のヒット

作品である(図3)。舞台はアメリカ中西部の町。学生結婚をしたが、流産した妻を養うために医学の道をやむなく断念し、指圧療法士として働くアルコール依存症の中年男ドクとその妻ローラの日常を描いている。今は断酒しているが、ドクはかつて治療のため精神科に入院していたことがある。子供はなく、2人の間はしっくりいっていないようにもみえる。シバというのは行方不明になった飼犬の名前であり、ローラはシバが帰ってくるのではないかと密かに望みをつないでいる。2人は婚約者のいる女子学生・マリーを下宿させているのだが、ドクはマリーと遊び人の男友だちとの関係を快く思わず、そのことで妻と意見が対立するようになる。やがてドクは再び飲み始め、妻に暴力を振るったがために、精神科に入院させられてしまう。退院後、ドクとローラは互いを認め合い、前を向いて生きていこうと決意した。シバは帰らないままだが、2人はその現実を受け入れる。シバは、彼らの若き日の夢や理想の象徴だったのである。

愛しのシバよ 帰れ 舞台 ダニエル・マン演出



図3. 全国アメリカ演劇研究者会議「アメリカ演劇11」(文献31:表紙)

『ピクニック』⁸⁾は前述したようにピューリッツァー賞を受賞し、インジの名声を更に高めた秀作である(図4,5)。この劇作は、9月第一月曜の労働休日のほぼ一日だけの物語である。場所はカンザスで、その日の朝、町にハルという若者がふらりとやって来る。無一文だったが、ある家の庭仕事をさせてもらい食事にありつくことができ、それがきっかけとなり、隣のオウエンス家の娘マッジやミリーたちと言葉を交わすようになる。その夜は町中総出でピクニックへ出かける習慣になっており、ハルも誘われミリーのお供をした。美貌のマッジは男友だちの

アランと一緒にいたが、ふとしたきっかけでハルとダンスに興じることになる。2人の間に恋が芽生えたが、アランがハルの過去の悪事を言いふらしたため、彼は逃げ出さざるを得なくなる。町を去る直前、ハルはマッジに結婚を申し込むが、彼女はためらった。ハルが列車で行ってしまった後、マッジは母親の制止を振り切って、トランクを抱えハルの後を追いかけた。



図4.『ピクニック』舞台（ローガン,G. 演出）、神西 清他訳「現代世界戯曲集」河出書房新社 1962年 口絵

実は、ブロードウェイで上演された『ピクニック』のエンディングはインジが当初考えたものではなく、舞台監督のジョシュア・ローガンが提案したものである。インジは元々、ハルが町を出て行きマッジは留まることが現実なのだ、現実とはそういうものなのだと考えていた。そのため、マッジが町を出たハルを追いかけるというローガンの案に、インジは「誰もそんな陳腐でハッピーな結末は望んでいない!」と反論した。しかし、これに対してローガンは陳腐でもハッピーでもないと言い返し、「もしマッジがハル—金も職もないほら吹き屋と駆け落ちしたら、悲惨だよ。確かに男と女の関係は続くかもしれないが、マッジと母親が望んでいた安楽な生活はないよ。マッジは母親と同じ運命、ガキが生まれ貧乏なままで終わるだろう。陰鬱な人生を繰り返すよ。それがハッピーか? それが陳腐かい?」と答えた¹⁾。

結局、インジは監督の言うとおりに書き換えたが、しかし「覚えておいてほしいが、俺は納得してないからね!」と言い放った¹⁾。インジはその結末によほどこだわったとみえ、のちに『夏の戦士たち Summer Brave』を執筆し、マッジを家に留まらせている。自殺の直前のインタビューの際にも、『ピクニック』のエンディングをめぐる未だジョシュア・ローガンに対し

て憤っているとはっきり口にした⁴⁶⁾。



ピクニック：コロンビア映画

図5. Voss, Ralph F. 『A Life of William Inge』(文献41: p.165)

ちなみに、この作品はピューリッツァー賞に加えて、ニューヨークドラマ批評家協会賞をも受賞したのだが、受賞の対象となったのが、ローガンによって促され渋々書き直した『ピクニック』であるのは皮肉というしかない。

もう一つ取り上げたいのは映画『草原の輝き』⁹⁾である(図6)。この作品も、そのシナリオが第34回アカデミー賞脚本賞を受賞した名作である。舞台は1920年代のカンザス。ハイスクール最終学年のバッドとディーニーは愛し合っているが、双方の親が男女の交際に保守的な考え方をもっているため、ディーニーはバッドの求めのすべてを受け入れることができない。欲求不満から彼は感情を爆発させ、しまいには誘惑に負け、別の女子生徒と関係を結んでしまう。バッドはフットボールのエース選手なので、女の子たちの憧れだったのである。それを知ったディーニーは、ショックから川に投身自殺を図ったが、救助され精神科病院に入院する。一方、バッドは父親の望み通りイエール大学に入ったが、勉学に身が入らず、酒場の女と深い関係に陥る。そこに大恐慌が起こり、石油会社を経営する父親が突然自殺してしまう。バッドは退学し、その女と結婚する。ディーニーは、縁があって医者となり結婚し、退院した。そして、バッドが結婚した事実を知らぬまま、彼に会いに行く。バッドは妻と農場をやっており、生まれたばかりの赤ん坊がいた。時間が元には戻らないことを2人は、ただ実感するだけだった。エンディングで、ワーズワースのオード(頌歌)が効果的に使われている。



図6. 『草原の輝き』(ワーナーブラザーズ映画)
エリア・カザン『エリア・カザン自伝下』(文献27: p.247)

これら三つの作品においては、この章の冒頭で述べたように“現実を受け入れること”や“妥協”ないし“諦念”が物語に通底するテーマとなっているように思われる。そのことを端的に示しているのは、とりわけ『ピクニック』のエンディングに関するインジのこだわりであるし、さらに、監督ジョシュア・ローガンの提案を受け入れたインジの態度そのものが“譲歩”であり、“張り合うことや対立の回避”であろう。

インジの作品にそうした特徴が認められることは、インジ文学(演劇)の研究家たちも指摘している。たとえば、ヴォスは「インジの作品の主要なテーマは“現実を受け入れること(acceptance)”であり、現実の中でベストを尽くすということである」と述べ²⁾、わが国の田中ゆりも同様に、「かれ(インジ)の主題は妥協である」⁴⁴⁾と語っている。さらに、久保田文も「現実をあるがままに受け入れること—これもまた、インジ作品におけるテーマの一つである」³²⁾と述べている。

『ドライバー』の訳者・小林 薫は、その後書きの中で「彼が一貫して描くのは、保守的な平均的アメリカ人を代表する中西部の中流家庭の平凡な日常生活である。しかしその何の変哲もないに見える生活の表面下にひそむ孤独、不安、失意をインジは共感と理解とをもってエックス線を通して見るように透視し、浮かび上がらせる。表面は穏やかに暮らしているかに見えてはいても、挫折し失望し感動を失い、しかもその生活をくつがえす勇気もないままに、結局はどこかで妥協して生きていく登場人物たち、

それがわれわれの姿にほかならないと彼は訴えるのである」³¹⁾と解説しているが、彼もまたインジ文学の特徴を“妥協”という点にみている。

また、『草原の輝き』の監督を担当したエリア・カザンは自伝の中で、この映画のエンディングについて「この終幕でわたしが好きなのは、何ともほろ苦い矛盾だ。それはビル^{注3)}が自分の人生から十二分に学んだことだった。つまり、幸福というものには限りがあるのだから、限られた幸福を受け入れざるを得ないということだ。そして、完全を望むのは何にもまして神経症的だということだ。人は喜びと同時に悲しみをもって生きていかねばならないのだ」²⁸⁾と語っている。

この「限られた幸福」や「喜びと同時に悲しみをもって生きていかねば」という表現からは、カザンもまた、インジの脚本の中に“現実を受け入れること”や“妥協”、“諦念”といった特徴を見て取っていることがわかる。

筆者の推測なのだが、こうした特徴を持つインジ作品の成り立ちの背景には、単に彼が劇作家になってから得た人生訓や処世訓だけではなく、それ以上に、幼少期から思春期および青年期にかけて形づくられた性格傾向が色濃く影を落としているように思える。そのことを念頭に置き、次にインジの幼少期の家族力動と思春期から青年期にかけての生活史がどのようなものであったかを辿ってみたい。

(注3：インジは、ビルという愛称で呼ばれていた。)

Ⅲ. 幼少期の家族力動、青春期

インジは5人兄弟の末っ子で、父ルーサー40歳、母モード42歳のときの子供だった。長姉とは16歳、長兄ルーサージュニアとは14歳、すぐ上の姉とも6歳離れていた。なお、次女は3歳で亡くなっている。

モードは神経質で感情の起伏が激しく、また、おしゃべり屋でもあった⁴⁷⁾。父のルーサーは旅回りのセールスをして年中、家を留守にしていたので、実質、モードが家庭を切り盛りしていた。とはいえ、彼女は長兄ルーサージュニアを精神的な支えとして頼り切っていた。

自伝的小説『ドライバー』^{注4)}の中でインジは、

母がルーサージュニアに信頼を寄せている様子を描き、自分がそれに嫉妬し、兄に負けまいと母の愛を求めたことを告白している。ルーサージュニアは車の運転が得意で、母が外出する際の運転手を務めていたが、その場面を回想し、インジは自らの分身である主人公をして「“ほく（ルーサージュニア）と一緒に車ならこわくないね、母さん？ ほくの腕を信用しないの？ あんな山道なんかほくは平気さ” それだけで母の不安は影のように消えてしまう。そして笑いながらこう言うのだ、“もちろんよ、こわくありませんとも。あなたは、すてきなドライバーなんですもの。もう心配はしませんよ”」（括弧内筆者）¹²⁾と語らせているが、この描写からは兄に対する嫉妬が窺われる。また、のちに母が亡くなった時の場面では、彼女の棺を前にして「未だに子供じみた愛情を母に抱いていたのだと思うと謙虚な気持ちといささかの戸惑いとを覚えるのだった。長年にわたってほく（インジ）に惨めな思いをさせてきたのは他ならぬこの子供じみた愛情だったのだ。ジュール（ルーサージュニア）よりも素晴らしい子供なのだ」と最後に母に思わせたいとあがき続けてきたのもこの愛のせいだったのだ。ジュールの死後、暗黙の約束のようにほくと母を縛りつけ、他のだれにもかほどに深い愛情をしたのもこの愛だったのだ。時に母を憎ませたのもこの愛だった」（括弧内筆者）¹³⁾という愛憎入り混じった独白を主人公のジョーイにさせている。

テレーズ・ジョーンズ^{注5)}は、自伝的な色彩が濃い5作目の劇『階段の上の暗がり』の分析を試みた論考「不自然な愛情 Unnatural Affection」²³⁾の中で、このインジと母、長兄という三者関係について次のように解釈している。「母親（モード）がジュール（ルーサージュニア）を単に上手な運転手としてではなく、素敵な運転手と評価している事実は、2人の関係がロマンチックな性質のものであることを示している。…ジュールは、母親のか弱く掴まえどころのない女らしさ（神経質で感情不安定な特徴）の信奉者であり礼儀正しい庇護者であることを熱心に演じている。彼は大袈裟なほど男らしく振舞う—それは婦人に対する慇懃さとしても表れている—が、そうした態度によって

ジュールは母親の理想の恋人になり、彼の弟（ジョーイ、すなわちインジ）の堂々たるライバルになっている」（括弧内筆者）²⁴⁾、「ジョーイは車の後ろのシートにおり、運転席の雄々しい男性（ジュール）とその隣の愛する母親の間に入り込もうとするが、それは不可能である。…必然的にジョーイはライバルに譲歩する。しかし、それによってライバル関係よりも、男同士の親密な結びつきがジョーイにとってより重要となるのは当然である」²⁵⁾（括弧内および傍点は筆者）。

ジョーンズの考え方を整理するならば、インジは幼児期、母モードと兄ルーサージュニアとのトライアングルの力関係において、ライバルの兄に“男らしさ”という点で敗北を感じ、母を彼に譲った。そして、母を諦める代わりに兄と親密になり、あたかも母から愛されるかのように彼から愛されようとする方向へとむきを変えた。その場合、ライバルの対象が父親でもなく、年齢の近い兄弟でもない14歳年上の兄であったことが、幼少のインジにライバルとしての立場を諦めさせ、兄との親密な関係を結びやすくさせたのかもしれない。

このような家族間の心的力動の結果、一つには“現実を受け入れること”や“妥協”、“譲歩”、“諦め”、“張り合うことや対立の回避”、“優しさ”、“受身性”などの言葉で表される性格傾向が、もう一つには同性愛の心性が幼いインジの内に根づいたのだと考えられる。ただ、同性愛に関しては次章で取り上げることにし、ここでは、そのような性格傾向がどのように形成されていったのかをもう少し詳しくみていきたい。

重要なのは、インジが7歳のとき、ルーサージュニアが敗血症のため21歳で急死したことである。モードにとっては大変なショックで、彼女の悲しみは強く長く続いた。モードの関心と愛情はインジに向けられるようになったが、それは過干渉や過保護といえるもので、彼にとって決して居心地の良いものではなかった。インジは朗読が得意で、学校や色々な集まりで詩を朗読したが、モードは彼に朗読用のジャケットやニッカーボッカーズを作ってやった。彼女はインジに対して余計な心配をし、また苛立っ

た。のちにインジはインタビュー⁴⁸⁾で「母は私を肉体的な臆病者にした。なぜなら、彼女は非常に神経質で、物事がうまく行かないと逆上したからです」と語っている。もしインジが風邪をひくと母を混乱させてしまうので、彼は自分に罪があるように感じた。「私がケガをするたびに、母は私以上に傷ついた。私が泳ぎに行くと、母は非常に心配した。ハイキングに行っても、母は心配した」という。家庭でのこうした過保護は、“小うるさい朗読屋”や“教師のペット”、“女々しさ”、“ママの子供”といったレッテルをインジに貼り付けることになり、彼はクラスで他の生徒から浮いた存在となった。学校で、インジはフットボールやバスケットボール、ベースボールなどには参加せず、何であれバカ騒ぎには怯えていた。

また、長兄が亡くなり部屋が空き、また経済的事情もあったので、独身の女教師にその部屋を貸した。この女教師は、母のモードと同様にインジに影響を与えた。シューマンの評伝(伝記)によれば、口達者な母親やお喋りの妹、元気いっぱい叔母、女教師に囲まれ、インジは良き聞き手となった³⁶⁾が、逆に言うならば、男性の役割モデルが不在の環境で育ったことになる。

こうした過保護・過干渉な母親やお喋りで活発な女性たちに囲まれ、インジの内にあった“現実を受け入れること”や“妥協”、“受身性”、“優しさ”などの傾向がいつそう強固になっていったとも考えられる。

ハイスクールに上がってからも、同性であれ異性であれ、親友や彼女と呼べる存在はいなかった。女性と付き合うことはなかったし、狩猟や釣りもせず、だから男同士の仲間づきあいもなかった。関心があったのは演劇と読書だった。その頃のインジを知るクラスメートの回想では、最初彼は明るく活動的だったが、次第に内省・内向的となり、周囲も彼を理解することができなくなったという。入学して数年経つとインジは、同級生たちと距離を保った付き合いをするようになっていた⁴⁹⁾。

更に、カンザス大学に入学してからは、同級生との交友の中で親密さに繋がるような状況が生じると、インジはその関係を遮断したいとい

う自身の衝動に気づくようになった⁵⁰⁾。

思春期から青年期にかけてのこうした交友関係の回避も、彼の“譲歩”や“受身性”、“優しさ”などの心の働きが関与していたであろうことは想像に難くない^{注6)}。

更に、劇作家として独り立ちしてからも、インジは人との関わりにおいて同様の態度をとっていた。たとえば、前出のエリア・カザンは「わたしが好きになった男性にしても、多くは“女性的”な性格を色濃く有している。テネシー・ウィリアムズ、クリフォード・オデッツ、ビル・インジは、等しく思いやりがあって謙譲な…」²⁹⁾とか、強情で融通のきかないアーサー・ミラーと「対照的な例はビル・インジだ。だが、彼は優しさゆえに、ときとして自分を裏切ることになってしまった。彼は精神的な危機に陥りそうになると、抗議するよりも、不愉快さを避けるために町を出ていった」³⁰⁾などと証言している。

このように、ジュニアおよびハイスクール時代や大学時代だけではなく、世の中に出てからもインジの態度や行動の内に“受身性”や“妥協”などの特徴が際立っていたという事実は、それらが性格傾向と呼びうる程度にまで達していたと考えてもよいだろう。

(注4: この小説が自伝的なものであることは、インジ自身が述べている。たとえば、1972年、「ロスアンゼルス・スタートタイムス」のシルビー・ドレークのインタビューを受けた際、インジは『ドライバー』が完全に自伝的なものだと言っている⁵¹⁾。また、インジの生涯をとおして親しい関係にあったロレッタ・ワットも、『ドライバー』が自伝的に正確な記述であると証言している²⁶⁾。

(注5: テレーズ・ジョーンズは「不自然な愛情」を発表した当時、コロラド大学医学部に籍を置く精神科医だったと思われる。)

(注6: それと同時に、他者との親密さを断とうとするインジの態度には、次章で述べるような同性愛感情が強く影響している可能性も十分考えられる。)

IV. インジの同性愛

1. 同性愛形成の要因

前章で指摘したように、幼児期における母モードおよび兄ルーサージュニアとのエディプス的なトライアングルの関係の中で、インジは兄との母をめぐるライバル関係から撤退した。そして、母を諦める代わりに兄と親密になり、ちょうど母から愛されるかのように彼から愛されようとする方向へとむきを変えたのだが、それがインジを同性愛へと導いたのではないかと思われる。

もう一つ、彼を同性愛へと向かわせた要因として、モードの苛酷さという点が挙げられるだろう。“苛酷さ”というのは、子どもに対する愛情と似て非なる彼女の過保護・過干渉や夫へのよそよそしさ・憎しみを言うのだが、それはモードの神経症的傾向の現われなのかもしれない。

彼女が非常に神経質で感情の起伏が激しく、幼少のインジを育てる際、逆上したり混乱したりしたことは既に述べた。夫ルーサーに対するモードの感情に関しては、『ドライバー』から窺うことができる。たとえば、「ぼくは父に対する愛を自覚したことで、母に憎しみを覚えている自分に気づいた。父から生き抜く勇気を奪ったのは母だったのだ。自分を取るに足りない人間だと思わせたのは母だったのだ。結婚の初夜以来、父の内なる男を憎み、しかもなお官能の喜びを求めたのも他ならぬ母だったのではないか¹⁴⁾、あるいは「母は変わらずしゃっきりとしていた。“全てをきちんと整頓しておくこと”に異様なほど神経をとがらせて、今でも家事いっさいをきりまわしていた。そして父の面目をつぶしてやろうとする気持ちを抑えきれないでいた。…母は相変わらず執念深く父を恨んでいた。誰に対しても心優しい女性であったが、ただひとり夫にだけは温かい心に向けることができなかつた。情欲に取り乱した自分の姿を知っているただ一人の男であったから、父を憎んだのかもしれない¹⁵⁾」といった描写である。

このような母親は、息子を同性愛へと向かわせる誘因となるのでなかろうか。テレーズ・ジョーンズは前掲の論考の中で、インジの同性

愛に言及しながら、「2人(ソニーとサミー)とも、男性の役割となるモデルがない。ソニー(子どもの頃のインジと考えられる男の子)の父親は遠くに行っている。サミー(ソニーが慕う年長の男の子)は自分の父親を知らない。その意味で、2人とも母親と結びつく特権を持っている。一方で、2人は同年代の仲間から、ソニーは“女々しい”がゆえに、サミーはユダヤ人であるがゆえに疎外されている。インジは、2人の疎外の責任が彼らの仰ぎ見る母親にあるというふうを描いている。そして、その疎外が、2人を同性愛という社会的・文化的辺縁に追いやる事態を形作った²⁷⁾(括弧内は筆者)と述べている。

ソニーが「疎外されている」のは“女々しい”からであるが、実際、インジは子どもの頃“女々しい”、“ママの子ども”と揶揄されていた。ジョーンズが指摘するように、インジは自伝的要素の強いこの作品(『階段の上の暗がり』)を通して、母・モードが彼を“女々しく”し、同性愛に追いやったのだと訴えたかったのかもしれない。思うに、“女々しさ”は、母親が一方的な過保護や過干渉によって子どもを去勢するところに生じるだろうからである。

2. 同性愛者としての苦悩

インジの同性愛については、評伝を執筆したヴォスや友人・知人たちが言及しているし、それらの中にはインジが自らの同性愛を打ち明けたという証言もある。

その一例として、著名な演出家のジャック・ガーファインは、「母(モード)と叔母たちが父(ルーサー)に対して行った仕打ちを憎んでいる。そのために私は同性愛者になった、もしくは、そうなるように仕向けられたんだ」(括弧内筆者)とインジが語ったことを回想している⁴⁾。

ヴォスの評伝にはインジの子供の時と思春期の時の、女装した写真が載っている⁵²⁾。彼の幼少期の頃の女装趣味については姉ヘレンの証言もある⁵⁾。後にインジが執筆した一幕もの『ちっちゃなクローゼット The Tiny Closet』¹¹⁾は、女装趣味がテーマとなっている。おそらく、彼はかつての自分の女装を思い起こし、その時の

心理を描いたのであろう。それと関連し、ハイスクール時代、インジが演技に対する情熱を持っていて、とりわけ風刺劇で女役になりきることに特別の才能を持っていると学校の顧問から評価されたことにも注意すべきだろう。

ただ、ヴォスはインジの女装癖や女役の才能に関して、女性に対する親和性を持っていても、それらがどの程度まで同性愛の徴候を示しているのかはわからないと述べている⁵³⁾。

17歳でカンザス大学に入学したが、インジは自分が性的に、また、態度や感じ方、将来の目標志向なども他の男子学生たちと違うことに少しずつ気づいていった⁵⁴⁾。たぶん、彼が自身の同性愛を意識し始めたのはこの頃だったのだろう。その点については、『ドライバー』の中の次のような記述が参考になる。

たとえば、「ぼくは同じ年頃の男の子たちから、女の子みたいな奴だと思われていた」¹⁶⁾、「もしかすると、ぼくは男と女の情事にも同じような怖れを感じていたのかもしれない」¹⁷⁾、「大学でおぞましい経験をしてからというもの、ぼくは肉体的な愛に対しては怯えを感じずにはいられなくなっていた。…それにぼくは、性的な行為は自分の尊敬する女性を貶めるだけの卑しい興奮としか看做すことができなかった」¹⁸⁾などという描写がそうである。ここで「おぞましい」というのは、同級生たちから“女々しい奴”と思われるのが嫌で、不快感を抱きながらも娼婦まがいの女と性行為に及んだことを指している。

インジは主人公・ジョーイ（インジの分身）に「ぼくは相手が誰にもせよ、その人との絆が強まりそうになると、そこから逃れなければならないという思いにかられる」¹⁹⁾と語らせているのだが、交友関係を回避しようとするこのような態度は、自身の同性愛的感情をめぐる半ば無意識的な葛藤の表れなのかもしれない。というのも、相手が男性の場合、彼と親密になってしまうと、インジは自らの同性愛感情に直面せざるを得なくなるし、相手が女性の場合でも、彼女と親密な間柄になれば、「肉体的な愛に対して怯えを感じずにはいられなく」なるからである。

その後、大学院を経てステファン大学で教員

として働く頃には、同性愛がインジの悩みの中心となっていた⁵⁵⁾。更に、スター・タイムズ誌を辞め、ワシントン大学セントルイス校で再び教職に就いたとき、同僚たちや周囲はインジの飲酒の問題に加え、彼の同性愛に気づいたようだった³⁷⁾。

それと前後するのだが、タイムズ誌での記者時代、取材を通じてテネシー・ウィリアムズと初めて会った。2人は精神的に似たところがあった。どちらも父親が不在で、母親の支配が強い家庭に育ち、同性愛者だった。2人はしばしばインジのアパートで会ったり、クラシックの演奏会に行ったりもした⁵⁶⁾。

ただ、インジは、出世作となる『シバ』以降も、自身のセクシュアリティの問題を隠し続けていた。一連の劇作の成功によってインジが得たのは、富と名誉、有名人の地位であった。しかし、アルコール依存のことは知られても、自分が同性愛者であることだけは知られられなかった⁵⁷⁾。

1950年代初期的一幕もの『地下室の少年 The Boy in the Basement』⁶⁾は、同性愛をテーマとした作品である。主人公のスペンサーは両親と暮らす46歳の独身男で、自宅で葬儀屋を営み、遺体を清める仕事をしている。母親は口うるさく、世間体を取り繕うことに腐心している。ある日、地区の婦人会に出席した母親はそこで、息子が同性愛者のバーに出入りしていることを耳にする。そのことを問い詰められたスペンサーは絶望し家出をしたが、母親から逃れることができず、翌朝には帰った。同じ日、スペンサーの家に入出入りしていた仲の良いアルバイトの高校生の男の子が溺死し、スペンサーのところに運ばれてきた。処理場となっている地下室で遺体と対面し、彼は虚しさややり切れない気持ちに襲われるが、その心のはけ口はどこにもない。血抜き処理を行っている最中、スペンサーはその場に崩れ落ちてしまう。全編を通してリアルで重苦しい雰囲気漂っており、同性愛者としてのインジの苦悩を映し出しているような作品である。

この短編に関して、ヴォスは次のように述べている。「重要なのは、インジがこの作品を書いたのが1950年代初めに精神分析の治療を受け

ていた期間なのだという点である。その治療を繰り返し受けても、インジは同性愛の罪と恥の意識から逃れることができなかった。スペンサーと同様に、彼は世間でいうところの“カミングアウト”ができなかった。この作品を書き上げたのち20年以上も生き、その間に同性愛に対して社会は寛容になり、性的な逸脱 (sexual deviation) もより広く理解されるようになったのにもかかわらず、である」⁵⁸⁾。

インジは人との親密な繋がりをもつことを避けていたが、ただ、女優のバーバラ・バクスレーとは親密な関係をもち、一時は結婚を考えた相手でもある。2人が知り合ったのは、バクスレーが『バス停留所』のヒロイン役をキム・スタンレーから引き継いだことをきっかけとしてであった。バクスレーはインジの同性愛を知っており、セクシュアリティの問題が彼の不幸な人生の最も大きな理由だと思っていた⁵⁹⁾。

バクスレーは、1950年代を通してインジが自尊心を持ち、ある程度、飲酒もコントロールできていたが、ただ、同性愛に関しては居心地が悪かったと考えている。同性愛の問題は小さくなかった。実際、それは常にインジを参らせていた。彼女が言うには、インジは人生の暮らし向きで勝利し、諸々の野心も実現した。ただそれでも、成功を喜べなかったのは、彼が自分のセクシュアリティを受け入れることができなかったからである。そこから、彼の深い孤独が由来し、人生を共にすべきパートナー（同性であれ異性であれ）を持てなかったのだという⁶⁰⁾。

また、1958年以降の話であるがその頃、インジは時々 A.A. のミーティングに出席していた。そこで、ネッド・ローレム（作曲家で同性愛者、アルコール依存症者）と知り合った。ローレムが書いた『ニューヨーク日記 New York Diary』には、インジの同性愛について記述している箇所があり、これは出版されたものとして非常に貴重である。日付はないが、「一月前、我々が二人きりとなったとき、インジは私の膝にバーナード犬のように飛び乗ってきた」という内容である。ローレムの日記はこの出来事があったから10年後に出版されたのだが、公開されてインジは憤ったのだろう。それ以降、2人の交流

を示す資料は見つかっていない。友人関係は、日記の出版と共に終わった可能性が高い⁶¹⁾。

インジの同性愛が上に述べたようなものであるとして、重要なのは、彼が自身の同性愛を恥じそれに悩み、カミングアウトできなかったことである。その理由はなぜだろうか。一つには、インジが生まれ育った当時の中西部という土地柄が挙げられるかもしれない。

『ドライバー』の中でインジは、ある男性同性愛者にまつわるエピソードを回想している。主人公・ジョーイと同じ町で洋品店を営むオグデン氏が男の子を自宅に連れ込み同性愛行為を行ったことが発覚し、彼は“男色”だという噂が町中に広まった。夫人は時を移さず夫と離婚して、全財産を手中に収めた。昔の友人は彼に話しかけようとしなくなり、オグデン氏は完全に町の余計者であった。とうとう警察からの要請によって、彼は町を去った。その後、彼がどこへ行ったのか聞いた者はいないという内容である²⁰⁾。またそれとは別に、同性愛者らしいという理由だけで、町のフラタニティを除名された準会員のことも取り上げている²¹⁾。

このような記述から推測されるのは、インジが学生生活までを過ごしたその当時の中西部カンザスという町の持つ保守性であろう。とくに同性愛に関していえば、それが共同体からの撤退を余儀なくされるほどのタブーであり、偏見の対象となっていた点である^{注7)}。そして、そのタブーや偏見という目に見えない規範の強制力が、そこで生まれ育ったインジの心に深く刻印されたであろうことは十分に推測し得る。

そして、自身のセクシュアリティをめぐるこの恥や苦悩が、先に述べた性格的な“妥協”や“受身性”などに由来する人生の生きづらさと並んで、インジを創作へと駆り立てた要因であったと筆者は考えているのだが、そこへ立ち入る前に、うつとアルコール依存の問題に触れないわけにはいかない。

（注7：アメリカ演劇の研究者である清水は、1950年代から1960年代の演劇・映画界において、同性愛のあからさまな描写はタブーであったこと、その頃のアメリカ社会は保守的で、同性愛者が主人公の芝居など、一般の観客が受け入れ理解する土壌がアメリカに育っていたとは思え

ないことを語っている³⁴⁾。演劇・映画界の中心だったアメリカ東部や西海岸ですら当時そうした状況であったならば、より保守的な中西部の1930年代にあっては同性愛に対する偏見が殊の外強かったものと推測される。

V. うつ、アルコール依存

1. うつ

評伝を著したシューマンによれば、インジが最初にうつを呈したのは大学院時代のときで、自分が現にやっていることと本当にやりたいこととの間に挟まれフラストレーションに陥ったためだという³⁸⁾。この気分の変調には、不眠も伴っていた。姉のヘレンによると、この大学院時代に始まった彼のうつは、数週から数か月間持続するのが常だったという。

シューマンが言及している「やりたいこと」とは何だろうか。インジは経済的な自立という問題から取りあえず演劇を教える教員になろうと思ひ、大学院に進んだ。しかし、彼の本当の夢は役者になることだった。役者こそが自己実現のための唯一の道だと考えていた。それならば、なぜインジは役者になることにこだわったのだろうか。それを理解するためには、彼の人生をもっと遡る必要があるだろう。

生育史のところで簡単に触れたが、小学校3年のとき、担任が生徒たちに、歌か朗読する人はいないかと訊いたとき、インジは立ち上がり、方言の詩を朗読したところ、教師と他の生徒たちを喜ばせた。この成功はインジを感動させた。この朗読の後、その地域の集まりで同様の朗読をするようになり、それが彼の演劇活動の端緒となった。後年、インジはそのことを振り返り「聴衆の反応というものを始めて体験し、それが自分に重要な意味をもった。というのも、他人とうまくやっていく方法がわかったからだ」³⁹⁾と述べている。

子どもの頃、“教師のペット”や“ママの女々しい子供”と呼ばれ、クラスで他の生徒から浮いた存在となっていたインジにとって、「他人とうまくやっていく」ことは切実な問題だったのである。

ハイスクールに進んでからも、女性と付き合

うことはなく、男同士の仲間づき合いをすることもなかった。演劇を別にすれば、関心を抱いたのは詩と小説だった。学年が進むにつれて、インジは内向的となり、周囲も彼を理解することが難しくなった⁶²⁾。

更に、カンザス大学に入学後も、対人関係上の困難さを抱えていた様子が窺える。なぜなら、インジは後年『出発 Departure』(未発表)という一幕劇で、大学に適應できず実家に帰郷したときの体験を描いており⁶³⁾、執筆のテーマとして取り上げるほど学生生活が生きづらいものであったと推測されるからである。

その後、復学したが、米国の大恐慌による経済的事情のために故郷のインデペンデンスに戻ることを余儀なくされ、その間、彼は地元のジュニア・カレッジに通った。その頃にも、同級生との親密な交友が負担となり、その関係を遮断しようとしたことは既に触れた。

いずれにしろ、対人関係を遂行する上でインジは困難さを抱えていたわけだが、それならば、人との関わりを回避しながら、それでも尚かつ、世の中を生き延びていくためにはどうしたらよいか。解決の鍵は、上述した子どもの頃の朗読の成功体験にあった。すなわち役者になれば、大人になっても社会の中で生きていくことができると若きインジは直感したのでないだろうか。

朗読とは人前で声によって演技することであるが、役者もまた、舞台の上で声や表情、身振りによって演技する。演技するという点では朗読も役者の仕事も同じである。そして、観客から評価を得られれば生計を立てていくことも可能となる。だから、他者と直接関わることが苦痛なインジにとって、役者という生き方はちょうど身に合っていた。“役者”にこだわったのは彼にとって死活問題だったのである。このような理由から、ハイスクールに上がって以降インジは演劇に熱中したのであろう。

ところが、大学院時代、舞台の上で過度の自意識と強い恐怖に襲われ、もう演技はしないと自らに誓わざるをえなくなり、役者になるのは諦めた^{註8)}。インジがうつを呈するようになったのはその後からであることを考えるならば、役者への断念が病の引き金となったのは想像に

難くない。

大学院以降のうつ経過は、彼の飲酒と密接に関連していると思われるので、次のアルコール依存のところ述べる。

(注8: この「過度の自意識と強い恐怖」は精神医学でいう「パニック発作 panic attack」ないし「恐怖症 phobia」—インジの場合は「舞台恐怖症」—の症状と推測される。前者は、突然かつ急激な不安の高まりであり、動悸や過呼吸、息苦しさ、意識もうろうなどを伴い、立ってられないほどの状態を呈する。後者は舞台に立つことに対する強い恐怖であり、演技を意識する余り、声が震えたり発声できなくなったりする。「パニック発作」も「恐怖症」も一度その状態に陥ると、同じ状況で再び同様の症状に襲われるのではないかという予期不安に襲われ、本人はその状況を回避しようとする。「上手に演技しよう」と過剰に意識する気持ちがこれら症状を惹き起こし、結果的にインジは役者を断念せざるを得ない事態へと追い込まれたと考えられる。同様の恐怖症は後年、自らの劇作の初演の際、上演が失敗するのではないかという恐怖に襲われる余り劇場に入ることができなかったというエピソードにも認められる。)

2. アルコール依存

インジは大学院を終えて教員となったのだが、そこで働くうちに、教員の仕事は自分にとって場違いであることが自分自身でもわかった⁴⁰⁾。教員を辞めて何か他の仕事といっても、役者は断念したし、また、もの書きになる自信も持てないでいた。この頃、インジの飲酒が始まったのだが、おそらく、教員生活への失意と将来への不安のために抑うつ気分が強まり、それを紛らわせるために飲酒に走った可能性が高い。ちなみに、この時期、初めて精神科を受診している。

とくに1948年(35歳)のイースターの頃、インジは自分の飲酒が一線を越えてしまった(飲酒を止められなくなり、依存症レベルになった)ことを自覚し、精神科医に相談したところ、A.A.に出席してみるようアドバイスを受けた。そこでは依存症を克服できなかったものの、インジはA.A.を通して依存症に関して十分に学

んだ。その経験があったからこそ、最初のブロードウェイ作品『シバ』の中で、主人公ドクのアアルコール依存症を真に迫ったものとして描くことができたのである。

医師-患者間の守秘義務のため治療の内容などを窺い知ることはできないが、知人へのインジの手紙からは、彼が一週間ほど精神科に入院したことがわかる。この入院はインジが35歳のときだが、自伝的小説『ドライバー』の中に似たような記述があり、主人公のジョーイ(インジの分身)は36歳のとき安定剤とウイスキーを飲んで自殺を図り精神科に入院したとある。匿名を条件としてヴォスに情報提供してくれた人物によれば、インジの入院は複数回あり、彼が治療を受けたのは飲酒とうつに対してだったという⁶⁴⁾。

1949年秋、ブロードウェイでの『シバ』の初演を控えて、インジは不安と緊張が高まり、当初は精神分析の治療を受けていたのだが、再び飲酒するようになった。加えて、主演女優と監督の都合で上演の大幅な延期が余儀なくされると、酒量が増え、酩酊してニューヨークのシアター地区をさまよった。飲酒をコントロールできなくなり、警察に勾留されたこともあった。プロデューサーたちは、インジの飲酒問題が上演を危うくするのを心配し、グリニッチビレッジ近くのサナトリウムにインジを入院させ、精神科医による治療を受けさせた。嫌酒薬(ジスルフィラム; disulfiram)の投与を受け、公演が開始されるまでインジはサナトリウムに留め置かれた。翌1950年2月、無事オープニングとなったが、インジは劇場近くのホテルで缶詰状態にされ、劇場へ出かける際にはスタッフが同伴した。とはいえ、上演が失敗に終わるのではないかという強い恐怖感から、インジは劇場の中へ入ろうとしなかった。オープニングの際に生じるこの恐怖感、彼が名声を確立した後も消えなかった⁶⁵⁾。

1950年代以降も、波はあったものの、うつと飲酒は続いていた。『シバ』や『ピクニック』、『バス停留所』などの劇作が成功しても、「私は落ち込んだ気分の中にいた」⁶⁶⁾と語っているように、インジは自身の成功を思ったほど喜べなかった。引き続き、精神分析の治療を受けてい

たが、執筆は規則的に続けていたので、治療はそれなりに効果があったものと推測される。

バーバラ・バクスレーによれば、1955～1959年の頃、飲酒した際、インジがしばしば物を壊したのを目撃したという。しかし、彼は怒りを彼女や他人に向けることは決してなかった⁶⁷⁾。

1961年の映画『草原の輝き』は好評を博したものの、その前後の劇『バラ』や『自然な愛情』、『パパはどこ？ Where's Daddy』は失敗に終わり、インジは意気消沈した。彼のうつは1964年に悪化し始めていて、薬物治療をいっそう必要としていた。薬物はクロルジアゼポキシド（前述の穏和精神安定剤 chlordiazepoxide）を使っていたが、良くなり、また、飲酒も重なり、1966年、カンサス大学のメディカルセンター精神科に入院した。匿名を条件として話してくれた看護師によると、インジのうつは“憂うつ”というよりは“ノスタルジック”であったという。休息とカウンセリング、治療によってうつは改善し退院した⁶⁸⁾。

同年末からインジの引きこもりは顕著となり、1971年明けのカルフォルニア大学での冬学期の講義にも行かなかった。同僚が語るところではこの時期、インジのうつは孤独と飲酒、睡眠薬によって悪化した。それでもインジは短期間の入院と治療を受けた後、気を取り直して執筆を再開した。

前年の1970年の後半から姉のヘレンが同居し、インジの世話をするようになっていたが、彼は次第に書けなくなっていた。

知人たちの回想では、1973年の4月一緒に朝食を摂ったとき、インジは太り、会話が少なかったと語った。バーバラ・バクスレーによれば、インジはアルコールと精神安定剤を一緒に飲んでいて。最後に彼女が訪ねたときは、自殺の手助けをしてくれないかと彼から頼まれたという⁶⁹⁾。

同年5月、自殺の数週間前のことだったが、インジはロサンゼルス自由新報のリロイド・スティールのインタビューを受け入れた。スティールによれば⁷⁰⁾、インジの顔色は青白く、体も弱々しかった。質問に答える際も、記憶と連想の海を彷徨っているように見えた。話し方

もゆっくりでノロノロしていた。「執筆は不可能だと思う、以前のように書けないのだ」とインジは語った。恐らく、飲酒量がいっそう増え、安定剤の影響も加わっていたのに違いない。

VI. 創作への意志、死の選択

1. 創作

インジを創作（劇作）の道へと進ませた動機は何だったのだろうか。

前章で述べたように、インジにしてみれば役者にもなれない、そうかといって、教員の仕事も自分の性に合わない。それがうつを引き起こし、更に飲酒のきっかけにもなった。もとより、普通の社会人として生きていくには、“優しさ”や“妥協”、“受身性”などの性格的な問題、そして同性愛の悩みが大きすぎた。

そうした状況にあるところに、32歳のとき、自分と境遇が似ているテネシー・ウィリアムズと出会い、インスピレーションのようなものを感じ、インジは自分も劇作家になろうと決意した。先に触れたように、2人には共通したところがあり、作家になろうという野心を抱いていて、インジは感ずるところがあったようだ。しばしば行動を共にしたが、シカゴでテネシーの手になる『ガラスの動物園 The Glass Menagerie』を一緒に観た後、インジは本格的に劇を書き始めた。シューマンによれば、インジがテネシーから学んだ最も価値あるものは、インジの真の望みが作家になることであることをテネシーが啓示してくれた点であるという⁴¹⁾。

創作という遣り方なら、実社会において他人と直接的な関りを持たなくとも、それまでの経験を素材にして、架空の世界の中で自らの諸々の体験や想い、考え方などを展開していくことができる。そして、作品によって人を楽しませ、成功すれば報酬が得られ、人生をおのれ一人で生きていくことも可能となる。このようにインジは考えたのでなからうか。

現実の状況から距離を取り観察者の立場に身を置くことが、生産に繋がり、さらにはその生産に伴う報酬や名声の獲得に繋がる—そのような生き方、すなわち劇作家の道をインジは選択したといえるだろう^{注9)}。

2. 死

インジは『シバ』に始まる1950年代以降の一連の劇作の成功によって、果たして人生の生きづらさから解放されたのだろうか。

「同性愛」の章で紹介したバーバラ・バクスレーの回想を思い起こしてみたい。インジは人生の暮らし向きで勝利し、野心も実現した。ただ、それでも成功を喜べなかったのは、彼が自分のセクシュアリティを受け入れることができなかつたからであり、それが常にインジを参らせ、そこから彼の深い孤独が由来していたのだと彼女は語っている。

同性愛の問題はインジにとって、決して小さいものではなかった。それどころか、彼はそれを恥じ、深く苦悩していた。既に述べたように、同性愛を恥ずべきものとインジの心に刷り込ませた要因として、彼の生まれ育った土地柄が大きく関与しているだろう。少なくともインジが幼少期から大学時代までを過ごした1920～1940年代にあってはカンサスが保守的で因襲にとらわれた共同体であり、それゆえ同性愛をタブー視し、同性愛者を排除する暗黙のルールが存在していたことは、自伝的作品『ドライバー』にみたとおりである。

自身の同性愛に関して晩年のインジがどのように考えていたのかを推測する手掛かりとして、1970年に出版された小説『ミス・ワイコフ』²²⁾は大変に興味深い。ちなみに、生前最後に出版された作品は『ドライバー』であるが、こちらは1950年代半ば頃から断続的に書き続けられたものなので、インジの最終的な執筆作と呼びうるのは実質、この『ミス・ワイコフ』であろう。不思議なことに、この小説に関する批評は皆無と言ってよいほど見当たらない。インジの評伝を著したシューマンとヴォスも、作品紹介という意味での簡単な記述に留まり、この小説の持つ意義やインジのそれまでの創作活動に占める位置づけなどについては触れていない。むしろ、語るのを避け、沈黙を守りたがっているかのように見える。穿った見方をするならば、二人ともこの小説をどのように評価すべきか困惑しているかのようである。しかし、筆者の目には、この小説はインジが自らの人生を賭けた作品、言いかえるならば、インジが同性

愛の苦悩から自らを解放しようと試みたメッセージ的な作品というふうに映る。

少し長くなるが、論を展開する上で必要なので、この小説のストーリーを次に要約する。

舞台は、第二次世界大戦後まもないカンザスの小さな町。35歳の独身女性イヴリン・ワイコフはハイスクールの教師である。彼女は有能かつ理知的で、また自由主義的信念が強く、人種差別に対しても批判的だった。

ある日、キャンパスの駐車場を通りかかったとき、車の後部座席で性行為に及んでいる若い男女2人の奔放な姿を目撃した。その後しばらく経ってから、イヴリンは閉所恐怖 Claustrophobia や憂うつ感、イライラ、不安、不眠、生理不順などに襲われるようになった。そのため知り合いの医者に見てもらったところ、早期月経閉鎖症と診断され、彼女はショックを受けた。その際、イヴリンは自分に恋愛経験がなく、男性恐怖を持っていることを打ち明けたのだが、医者は精神科を受診してみるよう彼女に勧め、紹介状を書いてくれた。

精神科に通いカウンセリングを受けるようになってから、男性に対するイヴリンの頑なな拒否の心は和らいでいった。半年間の治療が終結して数日経った午後、教室に居残って採点業務を行っていたところ、アルバイトの用務員として学校に出入りする黒人青年レイフと彼女は会話を交わすようになった。彼は短大生で、ハンサムなフットボールの花形選手だったが、世間からの人種差別に対して憎悪を抱いていた。

イヴリンは、レイフと肉体関係を持つことを秘かに望んでいるおのれの気持ちに驚いたが、それは自分に人種的偏見がないことを証明する手段になると自らを欺いてもいた。

結局、誰もいない教室の中で、イヴリンは拒絶しながらも、仕舞にはレイフを受け入れた。彼女は歓びを覚えたが、同時に罪意識も抱いた。2人の関係が3週間続いた後、イヴリンは繋がりを断とうとしたが、逃れられなかった。

やがて、2人の関係は周囲の知るところとなって、イヴリンは学校を辞めざるを得なくなり、町を追われるように去っていった。しかし、彼女はレイフとの関係を後悔したり嘆いたりはしなかった。自分を女として扱ってくれたレイ

フに感謝の念すら覚えていた。

以上が『ミス・ワイコフ』の概要である。この小説は誤解されやすいのかもしれないが、女性を貶めようとしたものでもなく、人種的偏見を助長するものでもないと筆者は考えている。インジは恐らく、自分をミス・ワイコフに置き換えてこの小説を書き進めたのに違いない。

要約から窺えるように、ミス・ワイコフは性的なフラストレーションを抱えていたが、それは、自身の同性愛を受け入れられず、また、カミングアウトもできずに苦悩していたインジ自身のフラストレーションに他ならないと見做すこともできる。そう考えるならば、イヴリンがレイフと性的関係を結ぶというシチュエーションは、同性愛者として生きていきたいというインジの欲求を暗に仄めかしたのではないか。というのも、白人女性が黒人男性と関係を結ぶことと同性愛者であることはどちらも、小説の舞台となっている中西部（第二次世界大戦後のカンサス）の保守的な共同体においてはタブーだったからである。更に、ワイコフとレイフの性的関係が露見したために、彼女が職を辞し、住む町からも出ていかざるを得なくなるというのは、インジの同性愛が世間に公となり、作家としての道を断たれるかもしれないという自身の恐れを象徴的に表しているようにもみえる。

同性愛を正面切ってテーマにした小説を書くことはインジ自身にしてみれば抵抗があったが故に、いま要約したようなストーリーの形でカムフラージュしたのではないだろうか。

このように読み込むならば、この小説のエンディングは決して暗澹たるものではない。『Good Luck, Miss Wyckoff』という原題からもわかるように、作者インジは女教師ワイコフに「グッド・ラック」とエールを送っているのであり、それは取りも直さず、同性愛者である自らに対する励ましであり、力を振り絞っての自己奮起であったと思われる。

ただ、結果的に書評が好意的ではなく、売れた部数も僅かだったこと、さらに三作目の『サーカスから来た少年』が出版を拒否されたという厳しい現実、インジを落胆させたのであろう。小説ではワイコフの性的フラストレーションを

解放させることに成功したのかもしれないが、作者インジのフラストレーション（同性愛者であることの苦悩）は解消されないままに残り、同性愛者としての自分の存在が社会から拒絶されたように感じたのでなかろうか。創作によって作者の実生活の悩みが昇華されるのは、作品それ自体の出来に加えて、その作品がどれだけ広く読まれ、かつ認められるかにも掛かっているのだろう。インジの同性愛は演劇や文学の世界、読者の間で公然の秘密だったとも考えられ、彼自身もそのことを薄々と気づいていた可能性がある。もし『ミス・ワイコフ』の売れ行きが順調だったなら、インジの自己肯定感が高まり、作家として、また一市民としてもっと先まで生き延びたかもしれない。

最後に、インジの自殺について触れておきたい。性格に由来する生きづらさが増し、また、同性愛を恥じ、それに苦悩するといっても、人はそのことだけで死を選ぶものだろうか。やはり、『バラ』以降の劇の連続した失敗とその後の『ミス・ワイコフ』を含めた小説の不評が彼にとって致命的な心の傷となったのではないか。インジの亡くなった後、姉のヘレンが「彼はもう書けなかったのです。書くことが人生での唯一の関心事だったのです」⁴²⁾と語っているように、創作こそがインジにとっては生存の命綱であり、その行き詰まりがインジのうつとアルコール依存をいっそう悪化させ、最終的に自殺へと彼を追いやったのだと考えられる^{注10)}。

Though nothing can bring back the hour /
Of splendor in the grass, of glory in the flower /
We will grieve not, rather find / Strength in
what remains behind.⁷²⁾

草原の輝き、花の栄光の時が戻ってこなくとも、嘆くことはすまい、むしろ後に残っているものの中に生きる力を見いだそう
(日本語訳: 筆者)

これは英国の詩人ワーズワースのオード(頌歌)の一節であるが、このフレーズをインジは好み、映画『草原の輝き』でも効果的に使った。しかし、自身の人生ではこのようにいかなかったのであろう(図7.)。



図7.『ピクニック』上演の頃のインジ
Voss,Ralph F.『A Life of William Inge』(文献41: p.139)

(注9：人生におけるこの観察者の立場は、一幕もの劇『勝利の重圧 The Strains of Triumph』¹⁰⁾の中でインジの分身とも呼べるブノワ教授によって披歴されている。)

(注10：アルコールと薬物(精神安定剤)の同時的で過量の摂取が、意識レベルの低下に伴う判断力の低下をもたらし、一方で心理的視野狭窄と衝動性を亢進させ、自殺企図の修飾因子となった可能性も考えられる。)

【まとめ】

筆者は当初、うつとアルコール依存がインジの人生と創作活動において大きな比重を占めているのではないかと推測していたが、資料を読み進むうちに、同性愛というセクシュアリティの問題こそがインジのうつとアルコール依存を惹き起こし、更には彼を創作の道へと否応なく引き込んだ要因に他ならないと考えるようになった。

その同性愛の形成を本論では、インジの主に幼児期から思春期・青年期にかけての生育・生活史という視点から説明しようと試みた。とはいえ、人のセクシュアリティの形成のメカニズムは単純なものではなく、環境要因や生物学的要因など様々なものが複雑に絡み合っている⁴³⁾。また、一人ひとりにおいても、それら要因の比重や絡み合い方が異なってくるであろう。その意味で、ここで試みた分析は一つの解釈で

あることを断っておきたい^{注11)}。

インジはなぜ自らのセクシュアリティをそれほどまでに悩み、受け入れることができなかったのだろうか。一つには、共同体や社会、組織に往々にして潜む異質なものを排除しようとする、いわば“外”からのまなざしであろう。もう一つは、そのまなざしが個人の心の中に規範となって根を張り、それが“内”からのまなざしとして彼を規制し束縛しようとする力であろう。インジにあっては、後者の力が思いのほか強かったのかもしれない。

WHOの『国際疾病分類 International Classification of Diseases』の改訂版(ICD-11)が2022年に発効する。そこでは性同一性障害 Gender identity disorder が精神疾患の分類から外れた。性的指向の多様性は病気ではなく、個人の状態というのがその理由である。けだし、「個人の状態」という言葉には、生まれついているものは言うまでもなく、幼児期から大人になるまでの成長の過程で形成された性的指向も、変えられる性質のものでなく、変えるまでもないという考え方が籠められているように思われる。

令和に入ったばかりの今年6月、お笑い芸人が一般人の性別を確認しようとして問題となった報道番組がある。その番組に関して、テレビ報道論を専門とする上智大学教授の水島宏明は、性的マイノリティーをめぐる状況が大きく変化しているにもかかわらず、テレビ局によって認識のばらつきがあると語り、「当事者の話を聞くなどマイノリティーへの想像力を働かせる全社的な取り組みが必要なのは」と指摘している^{注12)}。これは、番組制作に関わったスタッフだけではなく、私たち一人ひとりに突きつけられたテーマであろう。その意味で本論考が、そうした想像力を巡らせるための一助になればと筆者は考えている。

最後になるが、ヴォスはその秀逸な評伝『ウィリアム・インジの生涯 - 勝利の重圧 - A Life of William Inge - The Strains of Triumph - 』⁴⁵⁾のエピローグの中で「インジのすべての作品は、それが初期であれ後期であれ、孤独やフラストレーション、愛の複雑な痛み、その痛みを和らげてくれない家族をめぐって書

かれている。彼の作品のすべては、安心感の喪失や青春期の純真さの喪失、将来の明るい見込みの喪失、愛の喪失をテーマとしている」とし、それら孤独や痛み、喪失が「ほとんど常に彼の混乱した心の状態」を表していると語っている⁷¹⁾。

本稿では、その「混乱した心の状態」をもたらしたものが、同性愛というセクシュアリティの悩みであり、それに伴うアルコール依存とうつであると考えた。そうした問題を抱えながらインジが送った生涯を念頭に置き、改めて彼の作品を読み、観なおすならば、平凡で庶民的とも見える登場人物たちが陰影深く、味わいのある個性として浮かび上がってくるのではないだろうか。

なお、本稿の要旨は第65回日本病跡学会総会(2018年7月、慶応大学三田キャンパス)で発表した。

また、ウィリアム・インジの資料に関してご教示いただいた東北文化学園大学総合政策学部大野朝子先生(英文学)に深謝いたします。

(注11: 米国の『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』⁴³⁾には、同性愛の男性の場合、環境要因として「年上の兄」がいることが多いと記載されているが、このデータは興味深く、本論考の解釈を多少なりとも確からしいものにしてくれるかもしれない。)

(注12: 朝日新聞 2019年6月1日の記事に拠った。)

引用文献

- 1) Fisher, Kerk.: Picnic, Summer Brave, and the Peace of Staying. Edited by Jackson R. Bryer and Mary C.Hartig. William Inge - Essays and Reminiscences on the Plays and the Man -. MacFarland & Company, Inc., Publisher, North Carolina, p.75, 2014.
- 2) *ibid.*, p.74.
- 3) Bryer, Jackson R. and Hartig Mary C. (Editor): William Inge - Essays and Reminiscences on the Plays and the Man -. MacFarland & Company, Inc., Publisher, North Carolina, p.75, 2014.
- 4) Garfein, Jack.: He Knew the Poetry of Life. Edited by Jackson R. Bryer and Mary C.Hartig. William Inge - Essays and Reminiscences on the Plays and the Man -. MacFarland & Company, Inc., Publisher, North Carolina, p.276, 2014.
- 5) Inge, Helene Connell.: Memories of Happier Times. Edited by Jackson R. Bryer and Mary C.Hartig. William Inge - Essays and Reminiscences on the Plays and the Man -. MacFarland & Company, Inc., Publisher, North Carolina, p.204, 2014.
- 6) Inge, William.: The Boy in the Basement. Eleven Short Plays by William Inge. Dramatists Play Service INC, New York, pp.37-55, 1990.
- 7) Inge, William.: Come Back, Little Sheba. Four Plays by William Inge. Grove Press, New York, pp.1-69, 1979.
- 8) Inge, William.: Picnic. Four Plays by William Inge. Grove Press, New York, pp.71-148, 1979. (神西 清訳: ピクニック. 現代世界戯曲集. 河出書房新社, 東京, 1962.)
- 9) Inge, William.: Splendor in the Grass - from the Screenplay by William Inge, adapted to the stage by Andrew Leslie -. Dramatists Play Service INC, New York, 1994.
- 10) Inge, William.: The Strains of Triumph. Eleven Short Plays by William Inge. Dramatists Play Service INC, New York, pp.130-141, 1990.
- 11) Inge, William.: The Tiny Closet. Eleven Short Plays by William Inge. Dramatists Play Service INC, New York, pp.56-66,1990.
- 12) インジ, W. (小林 薫訳): むすこはすてきなドライバー. 新潮社, 東京, p.17, 1975. (Inge, William.: My Son Is a Splendid Driver. Boston and Toronto: Little Brown & Co.,1971.)
- 13) *ibid.*, p.217-218

- 14) *ibid.*, p.168.
- 15) *ibid.*, pp.189-190.
- 16) *ibid.*, p.132.
- 17) *ibid.*, pp.142-143.
- 18) *ibid.*, p.158.
- 19) *ibid.*, p.163.
- 20) *ibid.*, p.102.
- 21) *ibid.*, pp.141-142.
- 22) インジ, W. (国重純二訳): さようなら、ミス・ワイコフ. 新潮社, 東京, 1972. (Inge, William.: Good Luck, Miss Wyckoff. Boston and Toronto: Little, Brown & Co.,1970.)
- 23) Jones, Therese.: Unnatural Affection - Sons and Mothers -. Edited by Jackson R. Bryer and Mary C.Hartig. William Inge - Essays and Reminiscences on the Plays and the Man -. MacFarland & Company, Inc., Publisher, North Carolina, pp.185-200, 2014.
- 24) *ibid.*, p.194.
- 25) *ibid.*, pp.195-196.
- 26) *ibid.*, p.197.
- 27) *ibid.*, p.192.
- 28) カザン, E. (佐々田英則・村川 英訳): エリア・カザン自伝 下. 朝日新聞社, 東京, pp.249-250,1999. (Kazan, Elia.: A Life. Knopf, New York, 1988.)
- 29) カザン, E. (佐々田英則・村川 英訳): エリア・カザン自伝 上. 朝日新聞社, 東京, p.50,1999. (Kazan, Elia.: A Life. Knopf, New York, 1988.)
- 30) *ibid.*, p.415.
- 31) 小林 薫: むすこはすてきなドライバー 訳者あとがき. ウィリアム・インジ: むすこはすてきなドライバー (小林 薫訳). 新潮社, 東京, p.226, 1975.
- 32) 久保田 文: ウィリアム・インジの心の病. アメリカ演劇11 ウィリアム・インジ特集. 法政大学出版局, 東京, p.62, 1998.
- 33) 村上春樹、川本三郎: 映画をめぐる冒険. 講談社, 東京, pp.78-79, 1985.
- 34) 清水純子: 映画に見るインジ. アメリカ演劇11 ウィリアム・インジ特集. 法政大学出版局, 東京, pp.82-99, 1998.
- 35) Shuman, R. Baird.: William Inge. Revised Edition. Twayne Publishers, Boston, 1989.
- 36) *ibid.*, p.4.
- 37) *ibid.*, p.6.
- 38) *ibid.*, p.6.
- 39) *ibid.*, pp.2-3.
- 40) *ibid.*, p.6.
- 41) *ibid.*, p.8.
- 42) *ibid.*, p.19.
- 43) 高橋三郎、大野 裕監訳: DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院、東京, pp.449-450, 2014. (Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fifth edition. A Division of American Psychiatric Association, Arlington, VA, 2013.)
- 44) 田中ゆり: ピクニック論. アメリカ演劇11 ウィリアム・インジ特集. 法政大学出版局, 東京, p.28, 1998.
- 45) Voss, Ralph F.: A Life of William Inge - The Strains of Triumph -. The University Press of Kansas, Lawrence, 1989.
- 46) *ibid.*, p.267.
- 47) *ibid.*, p.9
- 48) *ibid.*, pp.14-17.
- 49) *ibid.*, pp.21-32.
- 50) *ibid.*, p.41.
- 51) *ibid.*, p.263.
- 52) *ibid.*, pp.16-18.
- 53) *ibid.*, p.22.
- 54) *ibid.*, p.37.
- 55) *ibid.*, p.72.
- 56) *ibid.*, p.82.
- 57) *ibid.*, p.117-121.
- 58) *ibid.*, pp.144-146.
- 59) *ibid.*, pp.160-162.
- 60) *ibid.*, pp.252-254.
- 61) *ibid.*, pp.177-178.
- 62) *ibid.*, pp.21-32.
- 63) *ibid.*, pp.29-31.
- 64) *ibid.*, p.98-99.

- 65) *ibid.*, pp.111-116.
- 66) *ibid.*, p.123.
- 67) *ibid.*, p.162.
- 68) *ibid.*, pp.234-235.
- 69) *ibid.*, pp.265-266.
- 70) *ibid.*, pp.266-267.
- 71) *ibid.*, pp.272-273.
- 72) ワーズワース, W. (山内久明編): 対訳
ワーズワース詩集 イギリス詩人選3. 岩
波書店, 東京, p.122, 2017.

参考文献

- 1) Johnson, J.: *William Inge and the Subversion of Gender -Rewriting Stereotypes in the Plays, Novels, and Screenplay-*. MacFarland & Company, Inc., Publishers, Jefferson, 2005.
- 2) McClure, Arthur F.: *Memories of Splendor: The Midwestern World of William Inge*. Kansas State Historical Society, Topeka, 1989.
- 3) 長田光展: *アメリカ演劇と「再生」*. 中央大学出版部, 東京, 2004.

Pathography of William Motter Inge -Depression, Alcoholism, Homosexuality-

Fumiaki FUTAKI

Abstract

William Motter Inge (1913-1973) is during the 1950s the most commercially successful American playwright, noted for works such as drama *Picnic* and screenplay *A splendor in the grass*. After the 1960s, he did not have a success, and the last novel was rejected by the publisher. In his early twenties Inge suffered from depression, alcoholism and also homosexuality. Critics comment that Inge's dominant theme is "acceptance" and "compromise", which author considers as his characteristics of personality rather than his philosophy of life. As far as family is concerned, his father was a salesman who is not at home almost all year round. As a result, Inge grew up under the strong influence of nervous, overprotective mother and eldest brother who is fourteen years senior to him. Inge's personality and homosexuality were formed by the psycho-dynamics with them. Inge had no choice but to take up writing professionally to escape from the bitterness derived from his personality and the agony of homosexuality. But Inge was forced to kill himself by the failure in playwright.

Key word : William Motter Inge, depression, alcoholism, homosexuality, American drama